
魔女三嬢

アサヒ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女三嬢

【Nコード】

N12770

【作者名】

アサヒ

【あらすじ】

まだテスト編集集中です。

今日から、高校二年生となった。新しい学年の始まりだ。今年こそは、有意義な年に……と言っても、クラスのメンバーが変わっただけで、さりとて変わったところは無い。

俺は、机に頬杖をつき、次から次へと入って来る生徒に目を向けていた。

知っているやつもいれば、知らない奴もいる。仲が良い奴もいれば、良くない奴もいる。

席は名前順、恐らく当分の間はこの座席でいくのだろう。前の黒板に、PCによって描かれた座席表が貼ってある。

俺は席替えを出来るだけ早くして欲しいと思った。

このままでは、始業式で思った授業を寝ずに聞く、という目標は到底達成できそうにも無からだ。

一番後ろの席には、プリント集めという面倒な仕事がかかされることが多い。

「よっ、宋一」

「……んだよ、また同じクラスか」

話しかけて来たのは、山田という奴だ。

あれは、確か……幸一のころだっただろうか。

色々あって話すようになり、以来こうやって話しかけてくる。
まさか、また同じクラスだとは思わなかった。

これで休憩時間は、暇になることも無いだろう。

「そりゃこつちの台詞だぜ……何見てんだ？」

「……新しいクラスのメンバーを、な」

部活にも入っていないから、知っている奴と知らない奴の差が激しい。

知らない奴は、本当に知らない。

「へえ、そんなのに興味があるのか……確か、興味が無いように言
ってなかったか？」

「山田の顔よりかは、興味がある」

おっ、あれは……

入って来た女に、不覚ながらも視線を固定される。

「うっせ……おっ」

入って来る女子に隣りの山田の顔が釘付けになっている。

「おっ、山田の知り合いか？」

「いや……可愛くね？」

「……ま、否定はしないけどな」

黒く、長い髪の毛の小顔にクリツとした丸い瞳。

調った良いスタイルに、スラリとした脚が見える。

正直、可愛いというより……美しい。

今でも数人の男子の視線を奪っている。

こんな美女がこの学校にいたなんて、知らなかった。

噂になっても良いくらいなのに。

もつとも、いた事を知っていても、これといって行動は起こさな
かっただろう。

「名前……何て言うんだろ」

「んなこと知るかよ」

美人は、前の席に座った。

これは、どういった神様の悪戯だろうか。

前の席………橘。

確か、そんな名前だったはずだ。

「おお………」

山田が唸るのも、無理は無い。

前を、ふわりと長い髪が横切る。

独特な、しかし良い匂いが同時にする。

臭いというのは、人間の記憶と深く関係を持つらしいが、この臭
いは一生忘れそうにもない。

「俺……お前と一緒にのクラスで良かった」

山田の俺の肩を握る力が痛いほどに強い。

……俺にどうしろと言うんだ。

『……決して期待はするな』

「宝くじを買った時、一等が当たれば良いなあってくらいの期待さ……

……じゃあな」

……かなり期待してやがるな。

担任が来たせいで、山田は席に帰って行った。

担任が何やら話を始めるが、全然集中出来ない。

それはいつもの事なのだが、理由はいつもの眠気では無い。

平静を装うのに必死になり過ぎて、周りの事にまったく気が回らない。

「……………えっ!?!」

『!?!?』

前の美女が、席をいきなり立ち、その勢いで、頬杖をついていた俺の机も揺れる。

頭が腕から外れ、かくつと崩れ落ちる。

「どーしたー、えーと……橘ア」

担任も橘とは初見らしく、座席表を見ながら名前を言った。

「あ……な、何でも無いです」

元通り席に座ると、服から何か取り出す橘。

後ろに右腕を回して、そこから左手に持ちかえるが後ろにいる俺には丸見えだ。

『……………？』

木で出来たような棒だ。

割りとまっすぐで、色合いもどことなく落ち着きがあって良い。やっぱり良いセンスをもっているのだろうか。

その棒の先が、黒板の左の方を向く。

『……………？』

ゆっくりと、上から下に杖が動く。

周りの奴等は、律義にも担任の話聞いていて、気付かない。

何をしているんだろうか。

よく分からないが、よく分からない儀式はすぐに終わり、橘はそれをまたポケットに戻した。

「……………！」

いきなり後ろ振り向き、大きな目を見開いて俺を見る橘。

頬杖をついているせいで、ほんの数センチ前に橘の顔がある。

近くで見ると、この反則的な美しさに心を奪われそうになる。

「……………」

「見た……………？」

『な、なにを』

「……………今さっきの」

『な、何のことだか……………』

それでも、視線を逸らす事なくずっと見てくる。
見られてはならない事だったのだろうか。

「おい橘ー！人が話してる時に後ろを向くなーッ！」

流石この学校の権力者だけあって、注意する。
肩書きは生徒指導部の一人という事だが、かなりの権力者だ。
うるさい全校集会でも、この先生が話すときは生徒も黙る。

「……………はい」

小声で答えて、前を向き直す橘。
また後ろを向きかけるが、また前を向く。

数秒立つと、また後ろを向こうとするが、やめる。
よほど俺にさっきの儀式を見られた事が気にかかっているらしい。

その拳動不振は、起立して、始業式に向かうまでずっと続いた。

『ふああああ……』

配られた教科書を早速机の中に詰め込み、立ち上がると欠伸が出た。

漫画を読み過ぎたらしい。

「……ねえ、さっきの事なんだけど」

クルリと後ろを向く橘。

……またその事が。

もう忘れかけていたというのに。

「お、俺山田って言いますッ！こいつの友達で！」

隣りから突撃してくる山田には、一向に目もくれない。

「おい、んな事より今は始業式に」

「邪魔しないで、今大事な話してるの」

「……おいおい、何キレてんだよ、たかが棒を……」

「やっぱり見たのね……！？ちょっと、君なんて言っただけ……先に帰ってて」

「……俺！？帰れ！？お、おいおいおい、今から始業式が」

「始業式なんかより大事な話してるの、だから早く帰ってって言う」

てるの！」

「がくつ……………宋一……………」

恨みのこもったまなざしを向けられる。
何が何だか、分からない。

俺こそ帰りたいような気分になってきた。

天は二物を与えず。

そんな言葉がふと脳をよぎる。

「…………俺にとっては、始業式のほうが大事なんだが？」

この美しさを天から与えられた橋は、頭の方は天から与えられな
かったらしい。

しかし…………美しさだけでも十分だろう、話さなければ目の癒しに
なる。

「…………じゃあ行きながら聞いて」

右足を一步踏み込むと、左足を一步引かれる。

続いて左足を踏み込むと、今度は右足。

俺が歩く一步先を、俺を見ながら後退し続ける橋。

異常に強いこの眼光だけは、さっきの担任とは比べ物にならない。

「さっき見た事は、全部忘れてちょうだい」

「何も見てない、何も見てないって」

「嘘」

「ほんと」

嘘だ。

「ぜつたいに嘘よ、だって杖って……」

『杖？俺が言ったのは棒……』

「そ、そう棒！あ、あれはね、ただの」

『だから棒って言ってるじゃねえか、ってかそんなの棒でも杖でも』

「私の人生に関わることなの」

『見てないから大丈夫だって……ほら、後ろ向いてつと危ねえぞ』

「真剣に聞いてよ！」

階段に差し掛かる。

後ろ向きに降りる橘。

あぶなっかしい事この上ない。

『だから聞いてるじゃねえか』

「それを聞いてないってっ……あわわわわっ！」

すっと頭が下に下がる。

……だから言っただったのに。

『だから言っただろーが!』

とっさに、橘の腕を引っ掴んで引き寄せる。

思った以上に体重は軽く、足を一段下に踏込むだけで、橘は落ちずにすんだ。

「……………」

『ありがとう、だろ』

やっぱりズレてる。

腕を離すと、さすがに橘は横に来て、普通に歩いた。

「……………」

『別に良いつて』

「もう、忘れなくていい」

『だから見てないって何度も言ってるだろ』

「実力不足よね、やっぱり……………」

木の棒を振る事は、何の実力によって発揮されるのだろうか。
しかし、「冗談であろうにも関わらず橘は本当に落ち込んでいるらしく、俯いている。

「ねえ、あの教室に人が来なくなるのってやっぱり夜だよな」

『……………ま、そうだな』

「遅ければ遅いほど来ない？」

『そうだが、遅過ぎても鍵閉められるぞ？夜中7時ならギリギリ大丈夫だろうけど……………』

「ふーん、七時ね……………」

『……………一つだけ言っておくが』

「……………な、何よ」

見つめると、その大きな黒い瞳に吸い込まれそうになる。慌てて視線をそらす自分が、情けなくなってくる。

『えつとだな……………まだ若い命なんだ。自殺とか、考えんなよ』

夜七時、誰もいない教室で……………あり得ないことではない。それほどに、橘は肩を落としてショックがっている。

「……………えつ！？」

『何がショックか知らないけど、まだまだ人生は長いからな』

「そ、それは長いだろうけど……………」

『ま、そう落ち込むなって……………おい、そっちは下足室……………』

「良いの、私帰るから。じゃあね。意味不明な忠告ありがとう」
意味不明なのは、俺の方である

『あ、ああ……………』

言うや橘は、本当に帰って行った。
荷物は何も持っていない。

……………始業式だからって、普通筆箱くらい持ってくるだろ……………
何故だか、橘の声が脳裏に響き続けた。

『……………いつけね』

始業式が始まってもおかしくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1277o/>

魔女三嬢

2010年10月10日12時48分発行